

夫婦パスタ日記

第12話（最終話）『ムール貝とイカのペスカトーレ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

長 沢 清 之 (41)	(58)	出版社『みらい書房』取締役
長 沢 理 恵 (55)		清之の妻、小説家、ペンネーム…若水エリ
長 沢 聡 志 (13)	(30)	理恵と清之の息子、デザイナー
長 沢 唯 (30)		聡志の妻、洋菓子店『ヴェール』パティシエ
権 藤 浩 一 (60)		洋菓子店『ヴェール』オーナー
権 藤 明 美 (58)		浩一の妻、百貨店『山越屋』企画部課長
立 花 圭 吾 (33)		印刷会社『京町印刷』営業部社員
立 花 かおり (34)		圭吾の妻、印刷会社『京町印刷』総務部社員
広 田 勇 (享年83)		唯の亡き祖父、元建設会社役員
広 田 節 子 (82)		唯の祖母、勇の妻、専業主婦
寺 川 千 晴 (25)		スーパー『ユーミー』レジ担当
寺 川 和 也 (27)		千晴の夫、部品メーカー社員

清之の秘書

映画製作実行委員会の人たち

スーパー『ユーミー』の客

洋菓子店『ヴェール』の従業員たち

1 出版社『みらい書房』本社ビル・全景

（朝）

2 同・八階廊下へ取締役室

エレベーターのドアが開き、清之が歩いている。

清之が、ドアを開けて中へ入る——ドアに張り付けられた札には『取締役室（文芸部担当執行役員）』の文字。

3 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役室

清之がジャケットをハンガーにかけ、デスクの椅子に座る——ノック音がして、秘書が入ってくる。

清之「はい」

秘書「おはようございます」

清之「おはようございます」

秘書「長沢本部長宛に、郵便物がいくつも届いておりますので、ご確認お願いします（といくつもの封筒を渡す）」

清之「ありがとうございます。（と苦笑して）
若水先生の担当をしていると、どうしても
ここを空けることが多くて、こんな風に郵便物も溜まってしまうんですね」

秘書「一通り宛先を確認しましたが、特に急ぎのものはありませんでした」

清之「あ、そうそう。昨日連絡した通り、今日十時に来客があります。応接のテーブルと椅子、綺麗にしておいてください」

秘書「かしこまりました（と出ていく）」

清之、大きな黒縁のPC眼鏡をかけて、パソコンのメール確認などの作業を進めていく。

清之（N）「少しややこしいのですが、私の今の正式な肩書は『取締役』です。その中でそれぞれ専門的な部署を担当するため、名刺などでは『取締役』の後に、カッコで『文芸部担当執行役員』という名前がつきます。つまり、『取締役』と『執行役員』は実質同じ意味合いになります。しかし、

普段私を呼ぶときに、いちいち『取締役』や『執行役員』つけるのはおかしな話なので、各部署の本部長という役割も果たすことから、社内で私は通称として『本部長』と呼ばれているのです。これは、同じく取締役になっている執行役員も同じことが言えます」

タイトル——『夫婦パスタ日記』

第12 話 『ムール貝とイカのペスカト
ーレ』

4 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役室
清之が仕事をしていると、ノック音が
聞こえる。

清之「はい」

と、ドアが開き、秘書が入ってくる。

秘書「失礼します。本部長、お客様がいらっ
しゃいました」

清之「お通しして」

秘書「（廊下を見て）どうぞ」

と、スーツ姿の聡志が入ってくる。

清之「（秘書に）ご苦労様でした。後のことは私がやりますから、業務に戻ってください」

秘書「承知しました（と出ていく）」

清之「悪かったな、急に呼び出して」

聡志「話だったら、年末に帰る時でも良かったのに」

清之「どうしたんだよ、そんなスーツなんか着て」

聡志「いくら父親に会うつて言っても、天下の『みらい書房』の執行役員様だろ。普段着ってわけにはいけないと思ってさ」

清之「そんなこと気にしなくても良かったのに。まあ、かけてかけて」

と、応接用のソファーに促し、お互いに向き合うように座る。

清之「話すなら、早いうちのほうがいいと思
つてさ」

聡志「何だったんだよ、急な話って？」

清之「聡志、本の装丁デザインってやったことあるか？」

聡志「いや、まだそういう案件はないなあ。
パンフレットとかチラシとかが多いんだよね。それこそ『ユーミー』の折り込みチラシとか」

清之「何だ、あのチラシお前が作ってるのか？」

聡志「うん。前の会社の頃から、付き合いがある『京町印刷』って会社からの下請けにはなるんだけどね」

5 印刷会社『株式会社京町印刷』・営業部
デスクで仕事をしている圭吾。

聡志（OFF）「営業担当の人と仲良くさせてもらって、他にもいろいろ仕事の発注をしてくださってるんだけど」

6 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役室

清之「そっか。まあ、そういう取引先の存在は大事だよな」

聡志「ああ、それで、その装丁デザインがどうかしたの？」

清之「やってみたいと思わないか？ いや、

聡志にやってもらわなきゃダメな案件なんだ」

聡志「せっかくそういう機会があるんだったら、ぜひ」

清之「どうしても聡志に装丁をお願いしたいって言う作家さんがいてな」

聡志「誰？」

清之「人気ベストセラー作家、若水エリ先生」

聡志「若水エリって……。え、母さん？」

清之「（大きく頷いて）ああ。母さんのたつての希望だ」

聡志「そうなんだ……」

清之「うちではな、基本的に出版社として取引のあるイラストレーターやデザイナーと一緒に仕事するのが原則なんだ。ただ、

作家の意向で、どうしてもこの人じゃなきゃっていう要望があれば、そこは柔軟に対応してる」

聡志「母さんが……いや、若水エリ先生が俺を指名してくださってるわけだ」

清之「そういうことだ。頼んだぞ、聡志」

聡志「……」

7 長沢家・二階の理恵の部屋

原稿を書き終えた理恵が、万年筆の蓋をしめる。

理恵「よし、書けた」

と、原稿用紙を整理する。

理恵（M）「数日前の Pasta 作りが息抜きになったこともあって、ここ数日の私の執筆に対するコンディションは最高だった。一段落や一セリフが書けるのがやっとだった数日前とは打って変わって、何枚も原稿が進んだ」

理恵、万年筆をじっと見る——キヤツ

プに『E r i・W』という名前が彫られて
いる。

理恵（M）「この、私の名前入り高級万年筆は、数年前、作家生活三十周年のタイミングで、息子が地元の百貨店『山越屋』の文具コーナーに発注してプレゼントしてくれたものだ。これまでいろんなボールペンや万年筆で原稿を書いてきたが、今はこれが一番書きやすい」

と、一階からインターホンの音が聞こえる――理恵、気づいて出ていく。

8 同・玄関

ドアを開ける理恵――スーツ姿の聡志が立っている。

理恵「どうしたの？ そんな格好して」

聡志「さっきまで父さんの会社にいたんだよ。

呼び出されてさ」

理恵「お父さんから聞いたのね。装丁デザインの
こと」

聡志「そう。びっくりしたよ、まさか母さんが俺に依頼してくるなんて。どうせ進めるなら早いほうが良いと思って、こっちに寄ったんだよ。とりあえず内容だけでも聞いときたかったし。それにさ、俺もちよつと母さんに相談があつたから」

理恵「相談……？ まあ、せっかく来たんだし、どっかランチでも行こうか」

聡志「原稿でエネルギー使って、昼作る余裕ないんだろ」

理恵「（苦笑して）そういうこと」

9 喫茶店

テラス席でランチをしている理恵と聡志。

理恵「それで、聡志の相談ってのは何？」

聡志「母さんさ、大学の客員教授になるつもり、ある？」

理恵「は……？」

聡志「いや先週さ、卒業生講話っていうやつ

があつて、久しぶりに大学に行つたんだよ。
今どんな仕事してるかとか、大学時代にどんなことしたかつていうのを話したんだけどさ、帰り際に教務の職員の人から相談受けたんだよ、文芸部の客員教授をお母様にお願いできませんかって」

理恵「へえ」

聡志「さつき、装丁デザインの話が終わってから、俺から父さんに一応相談したんだよ」

理恵「お父さん、何て？」

聡志「母さんの意見を尊重するってさ」

理恵「そう」

聡志「どう？」

理恵「有難い話だけど、ちょっと考えさせて」

聡志「（苦笑して）やっぱりな、そう言うんじゃないかって思ったよ」

理恵「いや別にね、断るってわけじゃないの。ただ、私もこの歳になつてき、生涯現役として作家活動ができるんだろうかって悩みもあるし、けどその反面ずっと書いていた

いっていう思いもあるのよ。聡志が通った大学で私が学生たちに何か教えられる機会があるのは有難いと思ってるわ。だから、考える時間が欲しいの」

聡志「そっか。母さんでも、そういう悩みあるんだ」

理恵「聡志も大変だろうと思うけど、正直自分で言うのは何だし、親バカかもしれないけど、次の母さんの作品の装丁デザインをやったら、聡志にとって大きな実績になると思う。お父さんも私もついてるから、大船に乗ったつもりで、私の新作の表紙作ってほしいの」

聡志「分かった……ありがとう」

10 街を走るハイヤー（翌日）

T 『翌日』

11 そのハイヤーの車内

後部座席で、資料を見ている清之。

清之（N）「『みらい書房』から出版されている小説を原作に映画化する企画が出る際、配給会社との連絡調整や、出版社を代表して映画製作実行委員会に属して様々な対応を行っていくのが、文芸部担当執行役員である私の仕事です。この日も複数の映画化プロジェクトが同時進行しており、私は配給会社をハシゴして会議に参加します」

12 配給会社本社ビル・会議室

清之を始め、実行委員会の人々が会議をしている。

清之（N）「キャスティングのこと、スケジュールのこと、出資金のことなど、議題は大体どこも同じような内容なのに、規模感が極端に違うため当然話の内容は全く違います。打ち合わせがいつ終わるか分からなかったので、会社にはそのまま直帰すると伝えてありました」

13 同・表（夕）

清之が出てくる——腕時計を見ると、
夕方五時を過ぎている。

清之（M）「もう五時か……」

と、家族連れやカップルが仲良く歩いていく光景を見る——その背景に輝く
イルミネーション。

清之（M）「そっか、今日クリスマスイブか」
と、鞆からスマホを出して、電話をかける。
ける。

清之「（電話に）あ、理恵さん。ごめんなさい、
原稿執筆中なのに。今日、クリスマス
イブだったことすっかり忘れてましてね。
けど、何か家でできないかなと思って、連絡
したんです。何かしてほしいこととか、
食べたいものありますか？」

14 長沢家・二階の理恵の部屋

スマホで電話をしている理恵。

理恵「えっとねえ……ムール貝のパスタが食

べたい」

と、スマホから清之の声。

清之「ムール貝ですか？ あ、もしかして今執筆中の作品に地中海の場面が出てくるからですか？」

理恵「そうなの。今日もね、いろいろ地中海のこと調べてたら、やたらとムール貝の写真が出てくるのよ。こんなの見たら、飯テロよ飯テロ。無性に、ムール貝が食べたくなっちゃったの」

15 配給会社本社ビル・表

スマホで電話をしている清之。

清之「分かりました。今から帰るので、途中で『ユーミー』に寄って、ムール貝買ってきます。白ワインはうちに確かまだ残ってましたけど、クリスマスなのでシャンパンも買ってきますね。それじゃあ（と電話を切る）」

16 街

清之が歩いている。

清之（M）「福岡に単身赴任していた頃、当時借りていたアパートに同じく本社から単身赴任していた社員たちを呼んで、パスタを振舞ったことがありました。その中の一つが『ムール貝とイカのペスカトーレ』でした。現役編集者だった頃から、『ペスカトーレ』がイタリア語で『漁師』を意味し、魚介類を使ったトマトソースのパスタであるという知識は持っていました」

17 福岡・アパートの一室（回想）

T『17 年前』

電話をしている清之（当時41）。

清之「どうした、聡志」

と、電話越しに聡志（当時13）の声。

聡志の声「父さん。パスタのレシピ、また何かある？」

清之、棚の中からレシピ本を取り出す。

清之（N）「『みらい書房』から出版された料理レシピ本を見ながら何度も作ったので、ペスカトーレの作り方は既にマスターをしていました。このレシピを当時中学生だった息子にも教えました」

清之「（電話に）ああ。ムール貝使って、ペスカトーレでも作ってみたらどうだ？」

聡志の声「何だっけ、ペスカトーレって？」

清之「魚介メインにして、トマトソースで和えるようなパスタにすれば、ペスカトーレになるよ。父さんの会社で出してるレシピ本があるから、一冊送るよ」

18 長沢家・リビング（同）

聡志が台所でペスカトーレを作っている。

清之（N）「それを伝えてからというもの、息子は冷凍シーフードを使ったものや、スーパーマーケットで売られているバナマイエビの下ごしらえをして、様々なペスカト

ーレを作るようになっていました」

19 スーパー『ユーミー』・全景（夜）

20 同・店内

イベントコーナーはクリスマス関連の
ものが販売されている——その商品た
ちは、値引きシールが貼られている。

清之、やってくるのと、

清之（M）「フライドチキンも買ってくか」

と、買い物かごに、値引きシールが貼
られた二個入りフライドチキンと、シ
ヤンパンの瓶一本を入れる——既にか
ごの中に入っている、冷凍ムール貝と
冷凍イカのパックとホールトマトの缶。

× × ×

レジ前にやってくる清之——買い物か
ごを引いた客の列ができています。

その一角のレジで、商品のバーコード
スキャンをしている千晴。

清之（M）「今日はセルフレジにしよう」

と、セルフレジのところまで、買い物
カートを引いていく。

21 長沢家・リビング

清之が帰宅すると、エコバッグの中か
ら、ムール貝の冷凍パックと、イカの
冷凍パックを取り出すと、電子レンジ
に入れて解凍する。

清之、電子レンジの横に立てかけてあ
るレシピ本を手にして、『ムール貝と
イカのペスカトーレ』のページを開く。
大きな完成写真と共に、材料と作り方
が載っている。

清之（M）「（読み上げて）『材料（二人分）
パスタ：二百グラム 水：二リットル 塩
：小さじ四 ムール貝：二百グラム イカ
：二百グラム ホールトマト：一缶 オリ
ーブオイル：大きじ二 にんにく：二片
白ワイン：大きじ四 パセリ：適量』。よ

し、やりましょう」

以下、調理工程をカットバックで。

清之、鍋に水と塩を入れて沸騰させる

——沸騰した鍋に、パスタを入れる。

清之（M）「鍋に水と塩を入れて沸騰させた
ら、規定の時間マイナス三分茹でる。七分
茹でのパスタを使っているので、ここでは
四分茹でていく」

× × ×

清之、にんにくを薄切りにする。

清之（M）「にんにくは薄切りにする」

× × ×

清之、にんにくをフライパンの中に入
れる——計量スプーンでオリーブオイ
ルを入れて、中火にかける。

清之（M）「にんにくとオリーブオイルをフ
ライパンに入れて、中火にかけて香りづけ
をする」

× × ×

フライパンの中で、フツフツしている

にんにく——清之、ムール貝とイカを
入れ、計量スプーンで白ワインを入れ
て、フライパンの蓋をする。

清之（M）「にんにくがフツフツとしてきた
ら、解凍したムール貝とイカ、白ワインを
入れ、フライパンのふたをして蒸す。蒸し
ている間、随時ムール貝が開いているかど
うかを確認する。この間が大体四分ほど」

× × ×

時間経過——四分後。

清之、フライパンを開ける——ムール
貝が開いている。そこへ、ゴムベラで
ホールトマトを入れ、実を潰す。

清之、トマト缶に少々の水を追加して
洗い流すようにし、そのままフライパ
ンに入れる。

清之（M）「ムール貝が開いたら、ホールト
マトを入れて実を潰す。缶の周りについた
トマトは、少々の水を追加して洗い流すよ
うにし、そのままフライパンに入れる」

×

×

×

清之、トングを使って茹で上がったパスタをフライパンの中に入れる。

清之（M）「四分茹でたパスタもフライパンの中に追加して、全体を煮込むように中火のまま五分程度煮込む」

×

×

×

時間経過——五分後。

フライパンの具材が明るい朱色に変わっている。

清之、菜箸を使って、パスタをすくいあげて、一本口にする。

清之（M）「（頷いて）ちょうど良い硬さ」

×

×

×

清之、火を止めて、パセリを振りかけると、トングで和えながらフライパンを軽く振る。

清之（M）「火を止めてパセリを振りかけ、全体を和えるとフライパンを軽く振る。あまり強く振り過ぎると、ムール貝が欠けて

しまう」

×

×

×

清之、二枚の皿に盛り付ける。

清之（M）「久しぶりに作った『ムール貝とイカのペスカトール』、これで完成」

22 完成した『ムール貝とイカのペスカトール』

23 長沢家・リビング（夜）

パスタの皿を、テーブルに運んでくる
清之——エコバッグからシヤンパンの
瓶を取り出し、テーブルの真ん中に立
てる。そして、フライドチキンを耐熱
容器に移して電子レンジで温める。

24 同・二階の廊下

清之が階段を上ってくると、理恵の部
屋のドアをノックする。

清之「理恵さん」

と、部屋の中から理恵の声。

理恵の声「はい？」

清之「晩ご飯できましたよ。フライドチキンも割引してたので、買ってきました」

理恵の声「あと二行で書き終わるから、ちょっと待ってて」

清之「じゃあ、先に下行ってますね（と階段を下りていく）」

25 同・リビング

清之、温まったフライドチキンをテーブルへ運ぶ。

清之「あ、取り皿とグラス」

と、小走りで台所に戻り、小皿とシャンパン用のグラスを取り出し、パスタの皿の隣に並べる。

清之「よし、準備完了」

と、椅子に座ってじっと待つ。

26 洋菓子店『ヴェール』・表（夜）

閉店後――浩一が鍵をしめて、出てくる。と、足音がして振り向くと、明美がやってくる。

浩一「明美、どうしたんだよ、こんなところまで」

明美「たまには、一緒に帰ろうかなと思って」
浩一「こりや明日、猛吹雪だな」

明美「失礼ね」

27 長沢家・リビング（夜）

シャンパンの入ったグラスで乾杯する

清之と理恵。

清之・理恵「メリークリスマス」

と、シャンパンを口につける。

理恵「シャンパンなんて、いつ以来かしらね」

清之「原稿書き終わったら、思いつきりお酒

飲んでくださいね」

理恵「とりあえずビールと日本酒と芋焼酎ね」

清之「まだちゃんぽんするつもりですか？」

理恵「そりゃ、原稿執筆中は禁酒してるんだ

もん。書き終わった時ぐらい浴びるほど飲みたいじゃない。(とパスタを食べ始める)
と) うん、美味しい。あなたのペスカトーレも久しぶりね」

清之「このレシピ、聡志にも教えましたよ」

理恵「ああ、確かに作ってくれたことあったわ」

清之「(食べて) うん、美味しいです」

理恵「昨日、聡志に言われた件なんだけどさ」

清之「ああ、大学の客員教授の件ですか？」

理恵「私、やってみようと思う」

清之「理恵さんがそう考えるんだったら、良いと思いますよ」

理恵「大学の仕事が入ったら、前より原稿執筆の時間は減ると思う。でも、私はそれで良いと思ってる。十分作品は書いてきたし、いやもちろん、もう書かないって言ってるわけじゃないの。ただ、ここからは第二の人生、直訳して今っぽく言うとかカンドライフってやつよ」

清之「理恵さんにとって、大学の客員教授が一つの経験になって、それが次の作品に活かせることだってあるかもしれませんからね。何事も経験じゃないでしょうか」

理恵「そうね」

と、清之のスマホに着信がかかってくる――清之、電話に出て、

清之「（電話に）どうした、聡志」

28 マンション・長沢家・DK（夜）

ピザを食べている聡志と唯――スマホをスピーカーの状態にして話している。

聡志「（電話に）ああ、父さん。明日の夜なだけでさ、唯がそっちにケーキ持ってくって」

唯「（電話に）すいませんお義父さん。うちの店の売れ残り処分になっちゃうんですけど、せつかならどうかと思って」

29 長沢家・リビング（夜）

電話をしている清之——その様子を見ている理恵。

清之「（理恵に）唯ちゃんが明日、売れ残り
だけどケーキ持ってきてくれるそうですよ」
理恵「（スマホに向かって）売れ残りでも何
でも、ケーキ食べれるんだったら大歓迎よ」
清之「（電話に）じゃあ、楽しみにしてるよ。
はいはい、じゃあメリークリスマス」

30 アパート・寺川家・リビング（夜）

スーツケースに荷造りをしている千晴
と和也。

和也「愛媛って、寒いかな？」

千晴「どうだろう？ まあ海風は冷たいよ」

和也「マジか」

千晴「けどね、そんな風にいちいち寒いなん
て言ったら、漁師の娘なんて務まらない
の」

和也「さすがな、千晴は」

31 広田家・夫婦の部屋（夜）

仏壇に手を合わせている節子——振り向いて、鴨居に掛けられている勇の遺影を見る。

節子「お父さん。メリークリスマス」

笑顔で写る勇の遺影。

32 アパート・立花家・居間（夜）

ソファーに座って、ココアを飲んでいる圭吾とかおり。

かおり「来年は、圭吾君と、（と腹部をさすって）この子と、三人で過ごすクリスマスだね」

圭吾「うん。きつとかおりちゃん、たくましい母親になるんだろうなあ」

かおり、自分の腹部を撫でる——じつとその様子を見る圭吾。

33 街（夜）

浩一と明美が歩いている——雪がちら

つき始める。

明美「あ、雪だ」

浩一「やっぱり、お前が迎えに来るから」

明美「本当に降って来たわね」

浩一「まあ、こういうクリスマスも良いじゃねえか」

34 マンション・長沢家・DK（夜）

台所で食器洗いをしている聡志と唯――
――唯、窓を見て、

唯「ねえ、雪降って来たよ」

聡志「あ、本当だ。天気予報当たったね」

二人ともベランダに出ると、雪を眺める。

35 長沢家・リビング（夜）

シャンパンを飲みながら、雪を見ている清之と理恵。

清之「降ってきましたね」

理恵「これからもっと寒くなるわね」

清之「指、かじかまないように気を付けてくださいね。乾燥もしますから」

理恵「ハンドクリーム塗りたくってやろう」

清之「理恵さん」

理恵「どうした？」

清之「例え大学の客員教授に就任したとしても、作家・若水エリはまだまだ現役で執筆を続けてください。理恵さんが作品を生み出して世に発表するうちは、私も専属の担当編集者として支えていきますから」

理恵「頼りにしてます。それに、聡志の装丁デザインも楽しみだしね」

清之「父親として、担当編集者として、待ち遠しいですよ」

笑い合う清之と理恵。

36 街全体の景観

雪はいつまでも降り続いている――。

おわり